

小学校音楽授業に管楽器を導入するためのストラテジー —金管楽器の場合—

A Strategy for Introducing Wind Instruments into Elementary School Music Class —In the Case of a Brass Instrument—

竹内俊一*
TAKEUCHI Shunichi

They say that a little over 40% of public elementary schools have been equipped with wind instruments of some form. However, it is rare that these instruments are used in the music class. In other words, there are just few opportunities for most of the students to experience these instruments. In this present situation, only some children get close to wind instruments through after school activities such as a brass band club.

Originally, children should be interested in wind instruments. If wind instruments were introduced into music class, all children would be able to experience them. This article has been worked on with a view that all children can get close to wind instruments, and moreover, they can surely learn how to play them.

At this time, I have decided to choose mainly brass instruments. This is because, it is easy to teach the principles for pronouncing tones with a mouthpiece, which are common to all brass instruments.

キーワード：教授方略，音楽授業，金管楽器，マウスピース，手作りホーン

Key words：Strategy, Music Class, Brass Instrument, Mouthpiece, Handmade Horn

はじめに

いささか古い情報であるが，全国の公立小学校の4割強に，なんらかの形で吹奏楽用管楽器が備品化されているという¹⁾。さらに，そのうちの4割の小学校で管楽器が使用されており，その他の学校では使用されないまま，楽器が放置されているらしい。せっかく備品化されている楽器を使用しないというのは，なんとももったいない話である。

筆者は，1991年に日本バンドクリニック委員会の委員となり，1994年まで務めた。その間，全国の小学校の管楽器活動に深く関わった。草津において開催されていた「全日本小学校管楽器教育研究会」（以下，全日小管研と略す）の全国大会の講座の立案・運営などを担当した（その全国大会は，やがて開催地を草津から浜松に移した）。先の委員を辞した後も，筆者は，先の日全小管研全国大会の講師を毎年のように担当し，各地区（北海道，東北，関東，東海・北陸，関西，九州の6地区）単位の研修会や各県・各市レベルの小学校管楽器教育研究会（以下，小管研と略す）に数多く，指導講師として招かれた。さらには，当時，音楽教育関係の専門雑誌に2年間にわたり管楽器活動に関する連載を担当した²⁾。

そうした活動をとおして，筆者は，小管研の世界にお

いて，少しは知られる存在となっていった。そんな中で，先の日全小管研の全国大会が関西で行われることが決まり，奈良県小管研が研究発表を引き受けることとなった。そして，筆者に研究発表の内容についての事前研究会（以下，事前研と略す）の指導の依頼が回ってきた。

奈良県は，小学校の管楽器活動（以下，小管活動と略す）が大変，盛んな所である。例えば，学年バンド（小学校の高学年の児童全員による管・打楽器活動），授業内管（音楽の授業の中で管楽器を活用），音楽集会における管楽器活動など，あらゆる形態の小管活動が存在し，活動内容も充実している。また，ご指導の先生方が本当に熱心であられる。筆者は，全国大会までの事前研に3回，お付き合いした。

その日全小管研全国大会（奈良大会）において公開された授業の1つを，本小論において紹介することとする。

I 小管活動についての基本的教育理念

1) 特別視される小管活動

管・打楽器活動は特別な児童・生徒たちのための特別な活動ではないはずであるし，そうであってはならない。しかし，多くの場合，学校教育における管・打楽器活動は，やや特別視された存在となっているようである。そ

*兵庫教育大学第4部（芸術系教育講座）

の理由は、いくつか考えられるであろうが、「音楽の授業の中で管楽器が使われていない」という現状が大きな原因の1つであるといえるであろう。そこには、次のような問題点が内在していると考えられる。

(1) 文化的価値を有する管・打楽器教育が軽視されている。

- ① 現代社会において、管・打楽器活動は高い文化的価値を有している（多くのプロフェッショナルなオーケストラやバンド、あるいは多くのアマチュアバンドなどの存在とその高い音楽性）にも拘らず、学校の音楽の授業において、その活動はほとんど行われていない。
- ② 日常生活の中で、管・打楽器を使った音楽は一般的である（テレビ、ラジオ、CDなどで聞こえてくる音楽のほとんどは、管・打楽器を含む音楽である）にも拘らず、学校の音楽授業において、その活動がほとんど行われていない。

(2) 学校教育の一環としての管・打楽器活動であらねばならない。

- ① 校内における管・打楽器の活動が学校教育課程から逸脱しないように、やらせ過ぎには十分、注意しなければならない。コンクールや発表会のための活動が過度になり過ぎて学校教育から逸脱しないようにしなければならない。
- ② すでに備品化されている管・打楽器類が、なぜ、学校全体の児童・生徒の使用に供されていないのか、不思議でならない。管楽器を吹きたがっている子どもは大勢いるはずである。そうした子どもたちのチャンスを摘み取ってしまっているのではなかろうか？

上記のとおり、管・打楽器教育は、音楽教育の重要な一領域であるはずである。管楽器には、子どもたちを夢中にさせる不思議な魅力がある。どこの地域にも、いつの時代にも管楽器を演奏したがる子どもたちは多く存在するであろうし、そうした子どもたちと一緒に音楽をしたいと欲している教師も必ず存在するはずである。

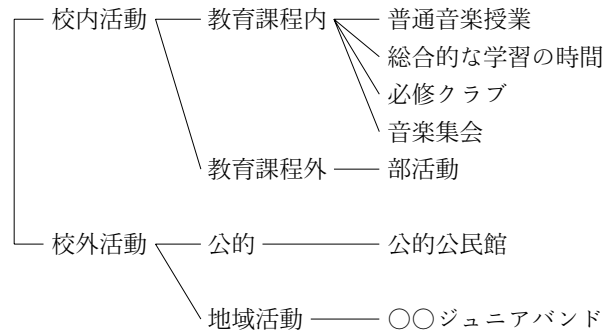
2) 小学生のバンド活動のフィールド分け

小学生のバンド活動といっても、その活動を成り立たせている組織の面に着目すると、様々なフィールドが存在している。それは大きく2つに分けることができる。1つは校内活動であり、もう1つは校外での活動である。前者の校内活動はさらに2つに分けることができる。1つは、教育課程内の活動である。つまり、普通音楽授業、総合的な学習の時間、必修クラブなどにおける活動である（ただし、必修クラブは平成14年度以降、時間を確保しにくくなっているようである）。教育課程外の活動は、いわゆるクラブ活動である。校外活動としては、県・市町村の行政が子どもたちを集めてバンド活動をしてい

るものと、最近、増えつつある地域のサークルとしてのバンド活動などである。

上記を簡単に図示すると、以下のとおりである。本小論において取り上げるのは、校内活動としての、普通音楽授業における管・打楽器活動についてである。

〔小学生のバンド活動のフィールド〕



II 授業内管楽器の実践

本小論において紹介する音楽授業は、1998年10月29日に奈良県香芝市旭ヶ丘小学校で行われた事前研の授業である（授業者は奥野智子教諭）。この授業研は、1999年2月に開催される全日小管研全国大会（奈良大会）に公開される授業のためのものである。すでに、8月に最初の事前研が行われ、指導助言者として筆者も出席している。音楽の授業にどのように管楽器を導入し有効的に活用するか、という問題意識と共に、管楽器を使って子どもたちにどのような能力を身につけさせるか、ということをも目的としたものであった。

その際、提示された学習指導案は、以下のとおりであった。

【音楽科学習指導案】

1998年10月29日（木） 第3学年1組 男子13名
女子16名 計29名
指導者 香芝市立旭ヶ丘小学校 奥野智子
学習場所 3階音楽室

〔1. 題材〕

トランペットに親しみ、楽しく音楽を聴こう

〔2. 題材について〕

本校は開校4年目の新しい学校である。管楽器の活動は、年に一度運動会でごく簡単なファンファーレを演奏するにとどまり、日常化されていない。トランペットについては、『ピカピカと金色に輝くかっこういい楽器』というイメージはもっているものの遠い存在で、音の出るしくみや具体的な知識はほとんどない。

鑑賞の活動は、いろいろな楽器、すばらしい音楽との出会いの場と考える。楽器の音色が音楽を決定づける要素になっていることも多く、楽器への興味は、楽曲・音

楽への興味へとつながるであろう。本題材では、映像だけではなく、実際にマウスピースで音をならしたり、楽器に触れたりする経験をとおして、トランペットと楽しく豊かな出会いをさせたい。音が出た喜び、憧れの楽器に触れた感動を十分に味わうことで、トランペットをより身近に感じて音楽を聴かせたい。さらには、楽器から楽曲へと興味を広げ、楽しく聴こうとする心情を育みたい。

〔3. 題材の目標〕

- ・トランペットの発音のしくみを知り、その音色に親しむ。
- ・曲想の変化を感じとり、情景を思い浮かべながら楽しく音楽を聴こうとする。

〔4. 評価基準〕

	評価の観点	評価の基準
ア	音楽への関心・意欲・態度	トランペットの発音のしくみに興味をもち、すすんで音をならそうとしている。
エ	鑑賞の能力	トランペットの音色に親しみ、曲想の変化を感じとって楽しく音楽を聴いている。

〔5. 教材について〕

○となりのトトロより「さんぽ」(久石譲作曲)

この曲は、子どもたちに人気のアニメ映画「となりのトトロ」のオープニングテーマで金管五重奏に編曲したものである。おなじみの軽快なふしがトランペットで奏でられ、トランペットの音色に親しみのもてる曲である。

○歌劇「軽騎兵」序曲(スッペ作曲)

この曲は、ファンファーレ - A - B - C - B - コーダ から構成され、それぞれの部分が長調・短調、強弱、速さなどの対象が鮮やかで、曲想の変化を感じとりやすい楽曲である。また、輝かしい音色をもつトランペットがひととき目立って聞こえてくる曲で、全体的な響きの中からトランペットの音色を聞き分けることが容易である。

トランペットに興味をもち、ふしを口ずさんだり、その音色を手掛かりにして場面を思い浮かべ、楽しく聴かせたい。

〔6. 指導計画及び評価計画 (全4時間)〕

次	ねらい	時	主な学習活動	評価	教材
第一次	トランペットの発音のしくみを知り、いろいろなものにつないで、その音色に興味をもつようにする。	1	・マウスピースで音をならす。同じマウスピースで高さの違う音が出ることに気づく。(リコーダーとの比較)	音が出た喜びを感じ、楽しく音をならしている。(ア)	さんぽ ↓ 軽騎兵序曲 ↓
		2 本時	・マウスピースにいろいろなものをつないで音をならす。 ・トランペットを吹いてみる。もう一度、金管楽器の音色を聴く。	マウスピースにいろいろなものをつないで楽しく音をならしている。(ア) トランペットの音色に興味をもち、楽しく音楽を聴いている。(エ)	
第二次	トランペットが活躍する場面に気づき、曲想の変化を感じとって楽しく音楽を聴くようにする。	3 4	・「軽騎兵」の6つの部分を聴き、カードにイメージした色をぬり、トランペットが活躍していたところにシールをはる。 ・もう一度聴いて、思い浮かんだ様子を書き込み、発表し合う。 ・教科書で場面を確認し、LDで活躍している楽器を確かめながら聴く。	トランペットの音色がわかる。(エ) 曲想の変化を感じて楽しく音楽を聴いている。(エ)	↓

〔7. 本時の指導〕

目標：マウスピースにいろいろなものをつないで音をならし、トランペットと友だちになろう。

展開：

学習活動	教師の支援	評価	備考
1. 既習曲を歌う。 ・リコーダーの即興演奏をする。 2. 学習のめあてをつかむ。	のびのびと体全体で表現できるように伴奏を工夫する。		
マウスピースにいろいろなものをつないで音をならそう。			
3. マウスピースにいろいろなものをつないで音をならしてみる。	・ひとりひとりが十分に活動できるように、適宜声かけをする。 ・手作りのアルペンホルンを見せ、身近なものから手作り楽器、さらに実物のトランペットへと興味をつなげるようにする。		ホース じょうご 塩ビ管 手作りアルペンホルン

4. トランペットにふれ音をならす。	<ul style="list-style-type: none"> ・マウスピースが同じ形だということに気づかせる ・音が出た喜びを味わわせるためにグループを見回り、助言する。 	トランペットに興味をもち、楽しく音をならしている。(ア)	トランペ ト
5. 金管楽器の音楽を聴く。	<ul style="list-style-type: none"> ・トランペットを吹くまねをしたり、唇をならしたりすることでトランペットの音色に集中させる。 	金管楽器の音色を味わって音楽を聴いている。(エ)	
6. 次時予告			

Ⅲ 考察

筆者は、常々、音楽の学習が成立する条件として、次の3つを設定し考察している。

1. 子どもたちが授業中、よく聴いているか。
2. 子どもたちが授業中、没頭してなにかに取り組む時間があるか。
3. 比較があるか。

音楽のみならず、全ての活動において、「よく聴く」という態度は学習の原点である。人の話を聞かない、音楽を注意深く聴かない、というところに学習を成立させることは極めてむずかしいことであるといえる。この授業において、児童たちは私語をすることなく、先生や仲間の発言や音を大変よく聴いている様子だった。

「没頭する」ことも音楽においては重要な要素である。活動そのものが楽しくて仕方がない。役に立つか、ためになるか、などという以前に、なにかに夢中になるということは学習の基本であるといえる。この授業において、15分間の「好きな音探し」の活動が、その没頭の時間となった。子どもたちは、夢中になって様々な手作りホーンを手当たり次第、吹きまくっていた。先生の制止によって、やっとその活動を終了するという有様だった。

3つ目の「比較」は、音楽科ならではの特別な領域であるといえるかもしれない。音楽美というものは、絶対的なものではない。比較することで、違いが鮮明になってくる。例えば、音色感をとってみても、音を聴いて演奏している楽器を言い当てることできるのは、無意識のうちに比較して聴いているからである。この授業の優れている点の1つは、その比較が随所にうまく設定されていることである。例えば、マウスピースだけを吹いた時の音と手作りのなにかを付けた時との音の違い。児童たちは、『これ（マウスピース）だけだとブーという音がしたが、物を付けるとブーという音がした』とか、『これ（マウスピース）だけだと小さな音だったが、物を付けると大きな音がした』などと発言している。つまり、音楽的な要素の中の音色感と音量感の違いを、ちゃんと聞き分けられているのである。さらには、自分が作ってきた手作りホーンと教師が作った手作りホーンの比較がなされていた。もしも、自作の物がなかったら、彼らはあれほどまでには夢中に「好きな音探し」に没頭していなかったのではないだろうか。自作の物を作る過程を

とおして、他人が作った物への関心（つまり、そこには無意識のうちに比較がなされている）が高まったのだと考えられる。要するに、自作の物があるからこそ、その学習の場が「借り物の世界」ではなくなったのだといえる。

そしてなにより、この授業の優れているもう1つの点は、学習の目標が隠されているにも拘らず、確実に達成されていることである。つまり、「ほんの15分ほどの学習により、全ての学習者が音を出せるようになる」ということである。しかも、楽しく遊んでいるうちに、知らぬ間に、である。この授業の「題材」は、先述のとおり、「トランペットに親しみ、楽しく音楽を聴こう」であり、「題材の目標」は、「・トランペットの発音のしくみを知り、その音色に親しむ。・曲想の変化を感じとり、情景を思い浮かべながら楽しく音楽を聴こうとする」であった。どこにも、「金管楽器のマウスピースを使って唇を振動させることができる」という目標は、掲げられていない。それにも拘らず、全ての児童が確実に音を出せるようになっているのである。

この授業を体験した子どもたちは、将来、本物の金管楽器を手にした時、初めて吹くにも拘らず、確実に音が出せるということを保証されたことになる。このことは極めて重要なことである。本物の楽器を初めて手にした時は、だれにとっても、楽しく、かつ、緊張するものである。ましてや、最初から音を出すことができたとしたら、それはもう大変な喜びであることは間違いない。つまり、音楽の世界へ一歩、足を踏み入れることができたということなのである。

おわりに

筆者はこれまで、自作の手作りホーンを持参して各地の指導者向け講習会にでかけて行った。それは、福岡、山口、兵庫、福井、静岡などである。本学においても講義の中で紹介しているし、本学付属小学校においても授業で取り上げてもらった。つまり、この約5年間、機会あるごとに、この「手作りホーン」を使った授業をしている。その間、「音が出なかった」という人は一人も存在しなかった。つまり、全員が音を出せるようになっていたのである。今年度から非常勤に行っている某私立大学の講義の中でも紹介してみた。大多数の学生たちが、

金管楽器の練習用マウスピースを手にするのが初めてであった。にも拘らず、彼らは全員、音が出せるようになり、筆者が持参した手作りホーンを嬉々として試奏していたのである。学生たちの授業後の感想文を、いくつか紹介することとする。

- ・女子学生：めっちゃ楽しかったです。最初鳴らなかったの、へこんだけど、なるようになって、めっちゃうれしかったです。ちょっと調子に乗って、本物のラップも吹いてみたくなりました。
- ・女子学生：今日の授業は本当におもしろかったです。中学に入学する時、陸上部が吹奏楽か本気で悩んで陸上の道に行った私には、好きなのに楽器と触れ合う機会が一度もありませんでした。好きなだけで終わっていたけど実際に、こんないい体験が今になってできるとは思ってもいませんでした。本当にいい機会をいただき有難うございます。
- ・男子学生：今日は本当に楽しかったです。マウスピースの先に付ける物によっていろいろな音色があって、すごく面白かったです。初めてやったけど音が出て良かったです。音が出ると、やっぱり楽しい。

受講生の約 60 人中、否定的な内容や消極的な内容を書いた学生は一人も存在しなかった。 Semester の最後の時間に、アンケートをとった中にも、ほぼ全員の学生が、自由記述であるにも拘らず、「手作りホーンの授業が楽しかった」と書いていた。この授業は、楽しいだけではない、本物の金管楽器を手にした時、「必ず音が出る」ということを保証しているのである。

【いくつかの手作りホーン】



(注)

1. 1992 年の調査によると、全国の公立小学校数は、23,979 校であり、その内、吹奏楽用管楽器を備品化している学校数は、9,890 校とある。(資料提供「日本バンドクリニック委員会」)
2. 拙著「連載 音楽室の "管楽器" 集合！」『教育音楽 小学校版』音楽之友社、1994 年 9 月号～1996 年 12 月号